かないほどになる景色を賞賛している。

「新後拾遺和歌集」は弘和三年（一三八三）後円融院の命によって、二条為重が撰進した二十番目の勅撰集である。そして、この中に霞ケ浦をよんだ歌が三首載せられている。

ほのかにもしらせてしかなあずまなる
かすみの浦のあまのいさり火

順徳院の作で、「東にある霞ケ浦の漁師が夜漁船で魚を寄せ集める照明の火のようすをほんのちょっとでもよいから知らせて欲しい」という意味であろう。

また、土御門院は次のようによんでいる。

しらなみのあとこそみえぬ天の原
かすみの浦にかへるかりがね

霞んでいて白波のあとも見えない霞ケ浦をめざして、雁が帰って行くと歌っている。霞ケ浦の秋から冬にかけての歌である。

次の歌は経重のよんだものである。

ともに来てうきなやたたんあずまなる
霞の浦のけぶりならねど

東なる霞の浦は霞ケ浦のことなのだろう。筑波山と同じように関東平野では霞ケ浦もかなり知れわたっていたはずである。

「続後拾遺和歌集」は嘉暦元年（一三二六）に提出した十六番目の勅撰集である。

恋瀬川うき名をながす水のさも
袖にたまらぬ涙なりけり

恋瀬川は新治郡八郷町に源を発し、上流を小桜川、中流を志筑川といい、千代田村の志筑地区を通過し、石岡市内を流れて高浜から霞ケ浦に流れこむ。非常にロマンチックな名であるが、当時どの辺を恋瀬川としていたかは不明である。

また私家集、私撰集にも多くの歌がみられる。建保四年（一二一六）ごろに「拾遺愚集」が完成している。藤原定家の歌集で、拙劣な歌の草稿という意味で、この名をつけたという。定家は中世以後の最大の歌人として仰がれ新古今の撰者にもなった人で、独自の歌論も唱えている。そして、余情の深い詩的表現である有心体を主張した。現在、定家の歌は約三八〇〇首が現存している。その中に霞ケ浦をよんだ歌がある。

春かすみ霞の浦をゆく舟の
よそにも見えぬ人をこひつつ

ここでも霞の浦を霞ケ浦とみたわけであるが、あるいはただ霞のかかっている湖をよんだのかもしれない。霞が一面にただよい、ほかには人っ子一人みえない春がす